

町長 ひとづと

斉藤 讓

栗山川と鮭

栗山川は、わが光町の母なる川である。昔から鮭が遡上し、山田町の山倉神社には、この鮭が奉納されていた記録もある。

当時の栗山川は流れも清く、沿岸の田畑を潤し、豊富に魚が獲れ、子供達が水遊びや小鮒釣りに興じ、人々の生活に深い関りをもってきた川である。この栗山川も、大きな恵をもたらす反面、一度大雨で増水すると、川の流れは荒れ狂い、濁流は周囲の作物を一飲みにする恐ろしい川でもあった。しかし、この栗山川の流れの中で子供達が育ち、人々の暮らしが支えられてきたことには間違いない。鮭の姿を見なくなったのは、いつの頃からか、又、どうしてなのか定かでないが、遡上が途絶えてから久しかった。この間に上流の川中が広がり、堰が何カ所も作られたり、そのうえ汚水の流入によって、川はかつての清流を失うなど鮭には帰りにくい川となってしまったようだ。いま、沿岸

の自治体は、共同で栗山川の浄化に取り組んではいるが、残念ながらこれといった効果を挙げにいたっていない。むしろ、家庭や工場などからの汚水によって、年々栗山川が輝きを失っているように、悲しくてならない。私には、栗山川は人々に見捨てられ泣いているように思える。いま治水対策事業として、下流九キロメートルに亘る改修工事が急ピッチで進行中であり、昨年屋根形橋が終了し、今年は木戸橋の改修までたどりついた。更に先を急ぐべく関係町と努力しているところである。やがて、この改修工事が終わり、新堤が築かれ、広い川中の栗山川が姿を現したとき、もし、悪臭が鼻をつく汚水の流れる死の川と化していたら何とするか。取り返しのつかないことになるのである。みんなの力で、母なる川、栗山川の清流をいま、蘇らせなければ手遅れになる。町が今年から始めた家庭雑排水対策も、この一策である。

ところで、この栗山川に、再

び鮭を呼び戻そうとする地域関係者の熱意が実を結び、県が稚魚の放流を始めた。昭和五十二年のことである。毎年沿岸の町の小学生などにも参加していたが、三月、寒風吹きすさぶ中で、無事の回帰を祈るような気持ちで放流が続けられた。待つこと四年、結果が現れたのは、昭和五十五年で、この年二十五匹が初捕獲された。あの時の、関係者の感激した姿が、今でも忘れられない。以後昭和五十八年の七百七十四匹を最高に、その前後は三百から四百匹台で振わなかった。それが、放流を開始してから丁度十年目にあたる昭和六十一年度に念願の千匹の台を突破し、千六百五十五匹を捕獲したのである。回帰率は〇・一六パーセントで、この附近で通常いわれる〇・一パーセントを上回った。この時町は、これを祝い、関係者の労を称え、今後より一層の回帰を願って、捕獲場所にはど近い木戸の提防際にささやかな記念碑を建てた。捕獲期は、毎年十月半から翌年一月半までの三カ月間で、最盛期は十一月中旬から十二月上旬である。定置にしかけた網から鮭を獲る作業は、寒風吹き、水凍る厳冬の中で行なわれ、捕獲にあたる皆さんのご苦労がしのばれる。



六十一年度は一月十四日をもって捕獲を終了し、過去最高の千八百八十四匹を記録した。(大半は四年もの) 特に、今年は採卵をしている木戸の太木正明さん宅前の水路に、満潮に乗って排水口から、かなりの数の鮭が遡上して遊泳し、産卵している姿もみられた。

水を腹いっぱい飲ませてやりたものだ。どの自治体も、いまふる里づくりの夢中である。私は、清い川と青い山が失なわれたところに、ふる里は存在しないと考えている。

捕獲に携わってきた人々

(敬称略)

中川清(新井) 椎名宏(関)

太木正明、同義夫(木戸)

鈴木孝(新井六十一) 年まで

(故)増島紀夫(篠本三区)

(故)井上史郎(作間内)

(故)佐藤廣治(五之神)



捕獲員のみなさん(記念碑の前で)